

インドにおける「語られる聖典」とその伝承

宗教伝統において、「語られる聖典」が長年にわたり担ってきた意義、および信仰者にとっての聖典の意味を理解するためには、具体的な宗教の事実にもとづいた再検討が求められる。ここでは、インドにおけるヒンドゥー教聖典を具体例として取り上げてみたい。

「語られる聖典」とインド学の誕生

インドにおいて、『ヴェーダ』などの聖典は、「語られる聖典」として、長年にわたり親の代から子の代へ、さらに孫の代へと世代を超えて口頭伝承されてきた。文字に依ることなく口伝に依って伝授されてきたのだ。聖典テキストの写本も確かに作られてはいたが、それはあくまでも記憶にもとづく伝承を補助する手段であった。『ヴェーダ』が文字化されて「書物」としても読まれるようになるのは、近代以降になってからであった。

人びとの信仰を支える『ヴェーダ』は、口頭伝承で語り継がれてきた。それらはエクリチュールとしてではなく、パロールによって、すなわち声と記憶によって伝承されてきた。こうした聖典継承の家系に属する学者は「パンディット」(サンスクリット語では, paṇḍita) と呼ばれてきた。『ヴェーダ』に通暁していた彼らは、専門的な知識をもつ教師として、「語られる聖典」の伝承に重要な役割を果たしてきた。

こうした「語られる聖典」をもつインド文化は、近代ヨーロッパにおける諸学問の成立に大きな影響を与えた。わが国におけるヴェーダ学の碩学、辻直四郎によれば、18世紀頃までは、『ヴェーダ』を秘守し資格のない者に教授してはならないとの『法典』(dharmaśāstra) の規定などもあって、キリスト教布教師たちは『ヴェーダ』に関する正確な知識をもつことができず、『プラナー』(古譚)の内容をもって『ヴェーダ』のそれと誤認したこともあったという⁽¹⁾。そうした中、18世紀後半になって、ヨーロッパでインド学(インドロジ)が誕生した。サンスクリット語の発見に促されて、比較言語学も成立した。インド学の基盤を築いたのは、当時のイギリス東インド会社の官吏、ウィリアム・ジョーンズ(William Jones 1746-94)、チャールズ・ウィルキンス(Charles Wilkins 1749-1836)、ヘンリー・トーマス・コールブルック(Henry Thomas Colebrooke 1765-1837)たちであった。インド古典研究において、西洋のインド学者たちは、聖典を暗誦していたパンディットたちからサンスクリット語を習得し、口頭伝承されていた「語られる聖典」を学んだ。それらの聖典は後に「書物」として出版され、まさに「書かれた聖典」となった。最も早くヨーロッパ語に全訳されたのは『バガヴァッド・ギーター』であった。イギリス東インド会社の書記のチャールズ・ウィルキンスによって英訳され、1785年にロンドンで出版された。

ちなみに、1786年2月2日、カルカッタのベンガル・アジア協会の設立三周年記念式典において、同協会の会長で東洋学者でもあったウィリアム・ジョーンズは、ヒンドゥー教の歴史と文化に関する記念講演をおこなっている。ジョーンズはサンスクリット語の語彙や文法がギリシア・ラテン語と著しく類似している事実を挙げながら、サンスクリット語とヨーロッパ諸言語が「もはや存在しないある共通の源」から発しており、サンスクリット語がギリシア語やラテン語よりも精巧に洗練された素晴らしい構造⁽²⁾をもった言語であると指摘した。この講演はインド・ヨーロッパ語族に関するそ

の後の研究のきっかけとなり、その後、比較言語学、比較宗教学、比較神話学などの人文学の成り立ちに道を拓いた。その意味でも、ヨーロッパ社会にとって記念碑的な意味をもっていた。

「語られる聖典」(『ヴェーダ』聖典)とその伝承

インドの「語られる聖典」、すなわち『ヴェーダ』などの聖典は、声と記憶によって伝承されてきた。「ヴェーダ」(veda)という名詞は、動詞語根√vidから派生し、本来「知識」を意味する。『ヴェーダ』は古代インドの宗教的テキストの集成である。ヴェーダの宗教は長い年限をかけて展開していったが、その歴史の中で、一貫して重要な位置を占めていた要素の一つが「語られる聖典」の言葉であった。

「語られる聖典」の言葉を一貫して重要視するヴェーダ宗教の基盤には、正しい資格をもつ者によって正しく発話される言葉とその霊力(実現力)への絶大な信頼があった。「ヴェーダ祭式」と呼ばれる宗教儀礼には、次のようなメカニズムがある。つまり、祭官による祭火への献供と、祭官が発する定式化された言葉によって、人間と神々とのやりとりがなされる。人間が正しい作法に従って献供を行い、正しい言葉によって神々に呼びかけるとき、その言葉の発話内容は実現し、祭式に対する神々からの返礼として、祭式を通して願われた人間の願望が成就するというメカニズムである。ただ、「語られる聖典」としての『ヴェーダ』において、中性名詞「ブラフマン」(brāhman-)は、初期『ヴェーダ』文献では「言葉とその霊力」であったが、中期『ヴェーダ』文献になると「宇宙の最高原理(梵)」へと、語の意味が拡がっていく。この言葉とその霊力すなわちブラフマンの知識は、社会の最高位にあったバラモンたち(祭官階級)に独占されていた。知識の独占と精確な伝承を守るために、「語られる聖典」としての『ヴェーダ』は、師から弟子へ口頭伝承されていった⁽³⁾。

インド文化において、聖典を継承する手段がパロールであったこと、すなわち口頭伝承であったことで、聖典の内容や表現がその語り手によって一定しなかったとも考えられる。ところが、インドではエクリチュールによる聖典の継承よりもパロールによる伝承が重視され、世代を超えて口頭伝承された聖典が、「書物」としての聖典と比べて、その精確さにおいて、ほとんど違いがなかった。そのことは極めて注目すべき事実であろう。

こうしたインド文化における「語られる聖典」としての『ヴェーダ』の具体例は、聖典の固定的テキストがパロールによって精確に継承されてきた宗教史的な事実を端的に物語っている。これと類似した宗教現象が、イスラームやユダヤ教など、世界の諸宗教にも見られる。このことは「語られる聖典」の意義を宗教学的に掘り下げて探究するうえで興味深い事実であろう。

[註]

- (1) 辻直四郎『ヴェーダとウパニシャッド』創元社、1953年、303～308頁。
- (2) William Jones, “The Third Anniversary Discourse, on the Hindus,” in *The Works of Sir William Jones*, vol. 3, London: printed for John Stockdale and John Walker, 1807, p. 34.
- (3) 後藤敏文「古代インドの祭式概観—形式・構成・原理—」『総合人間学叢書』(第3巻)、東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所、2008年、315～360頁。梶原三恵子「聖なる〈ことば〉の伝承—古代インドのヴェーダ学生をめぐる—」『東京大学文学部次世代人文学開発センター研究紀要』26、2013年、47～48頁。